

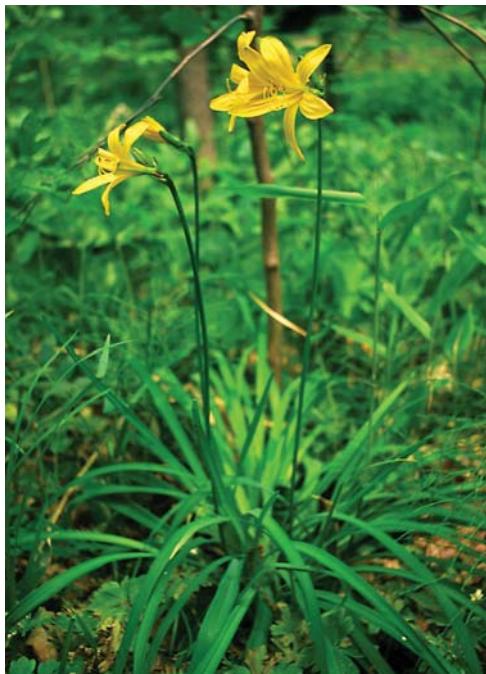
エゾカンゾウ（ゼンティカ）

Hemerocallis middendorffii var. esculenta

ユリ科

名前の由来

「萱草」は本来中国大陸の植物で、日本産ヤブカンゾウの母種であるホンカンゾウを指す。中国ではこの花を見て憂いを忘れるという故事があり、「忘れる」という意味を持つ「萱」の文字をあてた。「エゾ」は北海道をはじめ、北方に分布するという意味。別名で、ゼンティカ、エゾゼンティカ、ニッコウキスゲと多くの名がある。漢字名：蝦夷萱草（禅庭花）



エゾカンゾウ

形態的特徴

高さ40~80cmになる。葉は根元からび（根生）細長く無毛で平滑、上方は下に垂れる。茎（花茎）は直立し、茎頂に橙黄色でラッパ状の花を数個つける。花の基部につく枝（花柄）は短く、個々の花は基部で密接している。花は朝開花して夕方にはしほみ、毎日異なる花を次々と咲かせる。

類似種と見分け方

エゾキスゲ。エゾキスゲの花は黄色で、長くのびた花序の枝上にまばらにつく。また花は夕方開花し、翌日午後閉じる。



エゾカンゾウの葉



エゾカンゾウ。花の下につく茎が分かれず花の基部が密接



エゾカンゾウの花。
昨日、今日、明日の三つの花がつく



類似種のエゾキスゲ。
花の下につく茎が分岐している

生活サイクル

	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
開花期												
結実期												

生育環境・分布

やや湿った草地や、山地や海岸の草地、湿原に普通に見られる。

分布：国外分布は、南千島・樺太。

国内分布は、本州中部以北・北海道。

北海道内分布は、全道。海岸沿いから亜高山の湿地まで広く見られる。しばしば群生する。霧多布湿原やサロベツ湿原のエゾカンゾウ群落は見事である。

十勝地方では、やや湿った草地や、山地や海岸の草地、湿原に普通に見られる。



エゾカンゾウ

生活史

開花時期：6～8月

開花までの年数：不明

寿命：多年草。

他生物との関わり

花には虫が訪れる。



エゾカンゾウの花。
6～8月に咲く

興味深い話

■花の色はエゾキスゲのように黄色に近いものもあり、エゾカンゾウとエゾキスゲが自然交配している可能性もある。

■地下部にはコルヒチンなどのアルカロイドが含まれ、利尿、止血などに利用されるほか、黄疸にも効くといふ。

■食用としては花やつぼみ、若芽が用いられ、アクがないため料理しやすく、おひたしやあえもの、てんぷらなどにして食べる。季節を楽しむ程度の量を採取するにとどめたい。

■ゼンティカ及びニッコウキスゲの名で呼ばれることが多い。また、本州東北部から北海道・南千島産で、花柄がほとんど無く花被片が厚質な個体をエゾカンゾウ及びエゾゼンティカの名で呼び、本州中部の産で花被片が薄質で花柄がはっきりしている個体をゼンティカ及びニッコウキスゲの名で呼び、両者は別種もしくは変種であるという説もある。

■十勝地方のアイヌ語名は不明。

■上川のアイヌ語ではチカブキナ（鳥・草）、長万部ではカクコクムン（カッコウ・草）あるいはカクコクノンノ（カッコウ・花）と呼ばれる。カクコク～の方はカッコウが鳴く頃

に咲くことからと伝えられているといふ。また、サハリンアイヌはチライムン（イトウ・草）と呼び、イトウがとれる頃咲く花ということで十勝のフクジュソウ=チライムンと同じ名になっている。

■サハリンアイヌは、さっとゆでてヤマブドウの若芽を叩いた汁をかけて食した。また、塩水を煮立たせさっとくぐらせた花を刻み、チタタブ（我ら・刻み刻む・もの=魚のヒレ、白子、氷頭《ひづ》などを切り刻みあえた料理）に入れたりもしたといふ。



エゾカンゾウ。出たばかりの若芽は山菜として食される

配慮事項

生育場所である山地や海岸の草原、湿原をが重要である。

参考文献

「改訂版 牧野新日本植物圖鑑」牧野富太郎 北隆館 1989

「北海道植物図譜」滝田謙謙 自費出版 2001

「日本の野生植物 草本 I」佐竹義輔・大井次三郎 他 平凡社
1982

「アイヌ植物誌」福岡イト子 草風館 1995

「新版 北海道山菜実用図鑑」山岸喬・山岸敦子 北海道新聞社

1992

「森林で遊ぼうシリーズ3 おもしろい草花の話」北海道立林業試験場 北海道林業改良普及協会 1998

魚類

底生動物

両生類
爬虫類

トンボ

チヨウ

樹木

(在来種)
草花

(外来種)
草花

哺乳類

(鳥)
水辺類

(草)
シダ
樹木
力